

原 点

編集理事 原島 博



この8月に軽井沢で、ちょっと面白いワークショップを持つ機会が与えられました。そのタイトルは「顔」。参加者は約60名で、技術系と非技術系がおおよそ二対一の割合でした。講演はすべて招待で、技術系からは、パターン認識や通信を目的とした顔のコンピュータ処理技術の現状が紹介されました。また、非技術系からは、顔と心・感情に関連する心理学の話題、顔の進化を中心とする人類学の話題などが披露されました。対人コミュニケーションあるいは化粧文化の立場からの興味深い講演も伺うことができました。

研究の方法論も考え方も違う異分野の研究者が、互いに刺激を受けようという趣旨で企画されたワークショップですが、刺激という意味では、当初の予想以上の成功を収めたように思います。ワークショップ終了後、早速学際的な共同研究の提案がありましたし、一方で、ある文科系の方からは、「技術の恐ろしさを改めて考えさせられた」との率直なお手紙を頂戴しました。「人に優しく」との標語のもとに技術は次第に人間に近づいていく傾向にあります。技術者は人間に対してもっと謙虚にならなければいけないと、いろいろと考えさせられたワークショップでした。

その意味では、このワークショップは、私が今まで参加した中で最も学会らしい集まりでした。技術系の学会は職能団体としての性格も併せもっていますが、学会の本来の姿はやはり同好会だと思います。所属している機関が違っていても、更には学問的な立場が全く異なっても、同好の士が自由に意見を交換して切磋琢磨する姿が、学会に最も似合っています。

電子情報通信学会では、昭和60年にグループ制が実施され、更に分野ごとの独立性を強めたソサイアティ制の検討が、将来構想実施検討委員会の場において進められています。数年先の実施へ向けて、組織および財政面の具体的な検討に移っており、今後、会員の皆様の御意見を伺いながら、急ピッチで作業が進むものと思われま

す。学会は、来年創立75周年を迎えようとしていますが、学会の原点は同好会であるとの立場から、新しいソサイアティ制に期待したいと思っています。